



## カンボジア情報通信事情

在カンボジア日本大使館 二等書記官 **和田 孝行** (わた たかゆき)

### 1. はじめに

カンボジアというとどのようなイメージをお持ちでしょうか？

世界遺産のアンコール遺跡群はぱっと思いつくかと思いますが、そのほか、地雷、貧困などのイメージも持ち合わせているのではないでしょうか。また、開発途上国にありがちなイメージとして、通信事情は劣悪で十分なサービスを提供できていないというような思いを抱いている方も多いと思います。

カンボジアでは、ここ10年の経済成長が平均7%であり、一人当たりGDPも、2013年に1000ドルを突破して、国際通貨基金 (IMF) においては、2020年までの間7%を超える経済成長を続けると予想されています。経済成長に伴い、首都プノンペンにおいて、建物の建築ラッシュが始まるなど都市化が進んでいる一方、地方部は都市部ほど経済成長の影響を受けておらず、雰囲気ものどかな田園風景が広がっており、情報通信環境も都市と地方部ではサービスの格差があるように見受けられます。

今回は、あまり一般的ではないカンボジア王国の概況と現在の情報通信事情などを、現地に住んでいる経験などを踏まえてお伝えさせていただきます。

### 2. カンボジア全般について

#### 2.1 カンボジアの概況

カンボジアはインドシナ半島の中央部に位置しており、熱帯気候に属し平均気温は20度以上となっています。面積は日本の約半分の18.1万km<sup>2</sup>、人口は約1500万人、平均年齢は約25歳と若く、民族としては90%がクメール人で、中国人、ベトナム人、チャム人との混血が多い状況です。

言語はカンボジア語 (クメール語) で、周辺のタイ語、ラオ語、ベトナム語と異なり、モン・クメール語族に属しており語源はインドの文化や宗教に影響を受け、サンスクリット語・パーリ語に影響を受けたとされています。文字は図1にあるような独特の文字で母音23個、子音33個からなる表音文字で表わされます。

#### 2.2 カンボジアの歴史

歴史的には、中国の書物には1世紀頃に、現在カンボジ

ក ខ គ ឃ ង

子音の例

ច ឆ ជ ឈ ញ

ា ិ ី ឺ ឺ ឺ

母音の例

្ក ្ខ ្គ ្ឃ ្ង ្ច

図1. カンボジア語の文字

アのある場所に扶南王国があったと記述されていました。その後、9世紀以降のアンコール王朝期には、現在のシュムリアップ州に都を移し14世紀まで、アンコール帝国を築き、最盛期には、現在のタイ、ベトナム、ラオス等インドシナ半島の大半とマレー半島の北部の広大な土地を支配していました。

19世紀のフランス植民地時代を経て、1953年にカンボジア王国 (シハヌーク国王) として独立し、1960年代は平和を保っていましたが、1970年のクーデター後に親米クメール共和国の樹立後内戦が始まりました。1975年から1979年の親中クメール・ルージュ政権時代には、貨幣の廃止、都市住民の農村への強制移住、知識層の弾圧が行われ、100万人から200万人とも言われる国民 (当時の人口約2割) が死亡したとされています。知識層が失われた影響は大きく、当時の医者、教師等の数が大きく減り、その後のカンボジアの発展に大きな影を残しました。

その後、1979年から約10年間、ベトナム及びソ連の支援を受ける「カンブチア人民共和国」と、中国支援のポル・ポト派と西側支援の二派から成る民主カンボジア (三派) 連合政府による内戦が継続しましたが、1991年に和平協定が署名され、1992年のUNTAC暫定統治、1993年の総選挙を経て同年に新生カンボジア王国が誕生し、その後現在に至っています。



### 3. 情報通信環境の全般

カンボジアの首都プノンペンを歩くと、様々な携帯電話、ISPの広告等が目につき、通信環境の発展が見て取れます。当国の産業政策上、外資規制は緩く、外資100%の会社設立が可能であり、海外への送金規制もないなど、外国企業が参入しやすい環境となっています。

また、最新技術の導入に関し、移動通信において、2014年1月から4GLTEのサービスが開始されるなど最先端の技術の導入が行われている状況です。

現在の固定電話、携帯電話、インターネット加入者の全体的なトレンドについては、図2にあるとおり、固定電話は減少傾向、携帯電話は横ばい、インターネット加入者は増加傾向となっています。

#### 3.1 固定電話の概況

固定電話サービスについては、2006年1月、郵便・電気通信省（MPTC）から電気通信事業部門が分離され、公社としてテレコム・カンボジアが新設され、本公社がサービスを実施し、2009年2月にViettel社（ベトナム資本）も

事業を開始しました。固定電話の加入数、加入率の詳細は図3のとおりで、Viettel社参入後に一時的に伸びたものの2012年をピークとして減少傾向にあり、現在は36.1万加入（2.5%の加入率）となっています。

一般市民の電話利用の傾向として、固定電話を引くよりも手軽な携帯電話を利用するようになっており、また、公衆電話については、街中にはほとんど見当たらず、王立プノンペン大学内に1台見かけましたが、故障しており稼働していない状況でした。国際電気通信連合（ITU）の統計上、カンボジアは1993年に世界で初めて携帯電話加入者が固定電話加入者を上回った国となっており、固定電話の普及の前に携帯電話が普及し、そのまま定着したような状況となっています。

#### 3.2 携帯電話の概況

現在、カンボジアには表1にあるとおり携帯電話会社は6社あり、外国資本が入っている会社が大半を占めています。また、上位3社（Viettel社、Smart社、CamGSM社）で加入者数の98%以上を占めるなど、実質的には上位3社によ

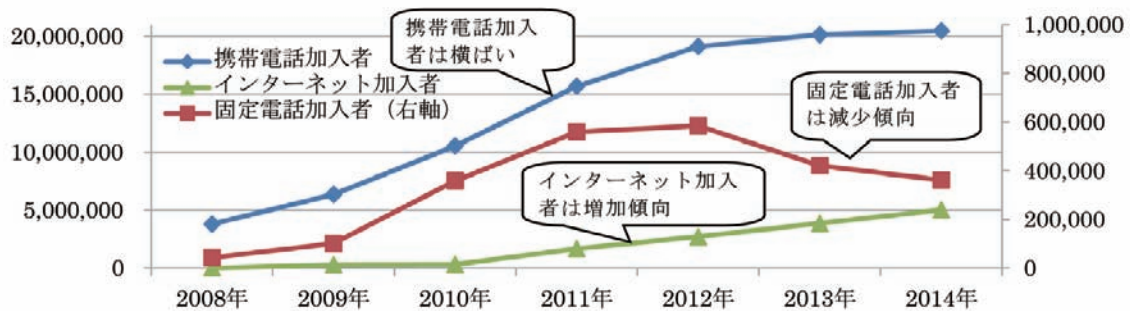


図2. カンボジアにおける電話加入者等の推移（郵便電気通信省資料より筆者作成）

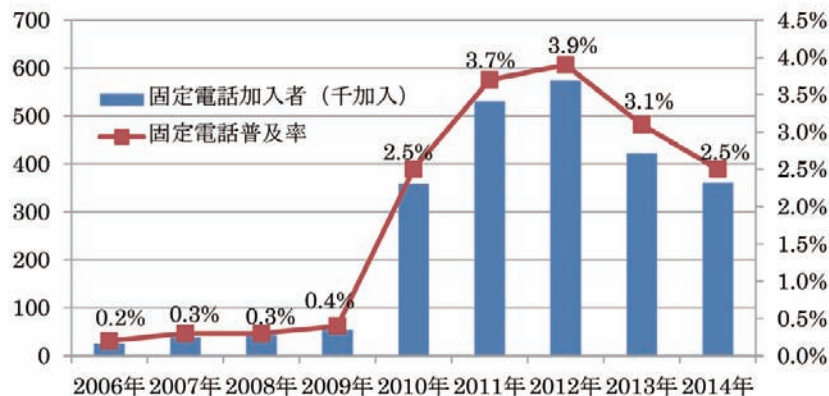


図3. カンボジアにおける固定電話普及率の推移（郵便電気通信省資料より筆者作成）

る競争が行われている状態となっています。

2014年には、GE-TELL社がシンガポール資本のSouth East Asia Telecomに買収され、2015年3月には業界3位のBeeline (Sotelco社) が業界1位のViettel社に売却される動きなど統廃合が進んでおり、この動きは今後も続くとみられています。

表1. カンボジアの携帯電話会社一覧 (筆者作成、加入者数順)

会社名	サービス名	ロゴ	サービス開始時期
Viettel	Metfone		2008年
Smart Axiata	Smart		1992年
CamGSM	Cellcard		1996年
CADCOMMS	qb		2006年
South East Asia Telecom	SEATEL		2008年
Xinwei	Cootel		2013年

### 3.3 ISP事業者の概況

2014年末時点で、29社にISPのライセンスが付与されており、FTTH、ADSLのサービスが行われています。Open net社とViettel社の料金水準は表2のとおりで、日本に比べると低速のサービスが提供されていますが、近年月額料金は低価格化しています。また、加入者数は2014年末時点には約503万加入で前年比30%増となるなど、2011年以

表2. FTTH、ADSL等の月額料金例 (各社HPより抜粋)

会社名	FTTH		ADSL	
	最大速度	月額料金	最大速度	月額料金
Opennet社	10Mbps	39ドル	4Mbps	18ドル
	15Mbps	69ドル	6Mbps	24ドル
	20Mbps	99ドル		
Viettel社	8Mbps	30ドル	4Mbps	12ドル
	10Mbps	35ドル	5Mbps	18ドル
	20Mbps	90ドル	14Mbps	24ドル
	50Mbps	350ドル		
	ケーブルインターネット			
	最大速度	月額料金		
PPCTV社 (ケーブル会社)	1Mbps	19ドル		
	2Mbps	39ドル		
	3Mbps	59ドル		
	4Mbps	79ドル		

降大幅に伸びています。

また、参考までに付け加えると、ケーブルテレビ会社 (首都プノンペンにおいては、ケーブルテレビでテレビを視聴している世帯が多く、同軸ケーブルは各家庭に接続されているケースが多い) によるインターネットサービスも行われていますが、FTTH・ADSLに比べて低速かつ高価な料金設定となっており、価格競争力がない状況です。

### 3.4 フリー WiFiの状況

カンボジアにおいては、首都プノンペンを始め地方都市部においても、フリー WiFiが発達しており、カフェ、レストラン、ショップ等ほとんどの場所で使用でき、利用者の一人としては大変便利です。ローカル向けレストランから、はたまた国会議事堂建物内 (さすがにフリー WiFiの看板は出ていませんでした) までフリー WiFiが利用できます。

## 4. カンボジアにおける携帯電話の利用

現在、SIMカード発行枚数ベースでの加入者数は人口を上回っており、カンボジア国民のほとんどが携帯電話を使用しています。カンボジアにおける携帯電話の利用者数、料金、使い方などの詳細をご紹介します。

### 4.1 携帯電話の加入数

携帯電話の加入数については、SIMカード発行枚数は2014年末時点で2,045万枚発行されており、人口比で130%程度となっています。携帯電話の保有率はいくつかの調査結果があり、2013年3月に調査を行った「カンボジア2013年中間年人口調査」(全年齢を対象としたサンプル調査) においては、携帯電話保有率は2013年3月末時点で81.4% (都市部94.5%、地方部77.9%)、2014年8月に調査を行った「Mobile Phones in Cambodia 2014」(The Asia Foundation) (15歳～65歳を対象としたサンプル調査) では、93.7% (都市部95.2%、地方部92.3%) となっています。また、スマートフォン保有率は26.1% (都市部38.6%、地方部20.7%) と、都市部と地方部では開きがあります。なお、都市部のうち特に首都プノンペンの人々の状況を見ると、過半数の人々がスマートフォンを使用しており、地方部との開きは更に大きい印象があります。

### 4.2 携帯電話の加入方法と料金

携帯電話を利用するには、街中にある携帯電話ショップで携帯電話を購入し、SIMカードショップで購入したSIM





カードを挿入すれば使用することができます。SIMカード購入の手続きについては極めて簡素であり、SIMカードショップに行き、身分証明書（パスポート、IDカード等）を提示すれば数分で発行されます。基本的にサイン等を求められることはなく、外国人1ドル、カンボジア人25セントで発行されます（キャンペーンによりSIMカード代が無料の場合もあります）。

### (1) 携帯電話の価格

街中の携帯電話ショップに行くと、様々な種類の携帯電話が売られています。10ドル代からあるストレートタイプの電話機から、100ドル前後の廉価版のスマートフォン、400ドルから600ドル程度のソニー製、サムソン製スマートフォン、700ドルを超えるアップル製iPhoneなどが様々売られています。

カンボジアの縫製業工場労働者の今年の最低賃金は月



写真1. 街中の携帯電話ショップ



写真2. 空港のSIMカード売り場

額128ドルで、残業代等を含めると月額200ドル前後と言われており、所得に対して高額なスマートフォンを購入する場合はローンを組む傾向にあるようです。

### (2) 携帯電話の月額料金と通話料金

日本と異なり、90%以上がプリペイド方式で料金を支払っていると言われています。いくつかの支払い方法があり、代表的なものとして、路上で販売しているスクラッチカード（各社ごとに1ドル、2ドル、5ドル、10ドル等の種類があり、買う際はサービス名と金額を言う）を購入するか、自動支払機に自分の電話番号を入力してお金を入れてチャージする方法などがあります。

上位3社の主な通話料金及びSMSの価格は、表3のとおりほぼ横並び状態となっており、あまり差がありませんが、各社、トップアップボーナス（一定期間内に携帯電話の料金をチャージすると数倍の価値になる）や、図4のSmart社の例のように、1ドル分のチャージを18ドル分（2週間同一キャリア内通話、SMS及びインターネット接続に使用可能）に変換できるようなサービスを提供し、加入者の囲い込みを実施しています。



写真3. 携帯電話スクラッチカード売り場

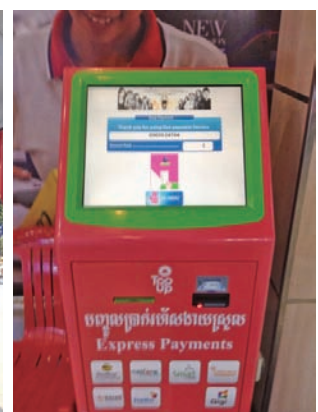


写真4. 携帯電話の支払機



図4. Smart社プロモーション

表3. 通話料金及びSMSの価格

サービス名	通話/分		SMS/通	
	ネットワーク内	ネットワーク外	ネットワーク内	ネットワーク外
Metfone	5cent (24時～18時) 7cent (18時～24時)	8cent	2.5cent	4cent
Smart	5cent (24時～17時) 7cent (17時～24時)	8cent	1cent	5cent
Cellcard	5cent (23時～18時) 7cent (18時～23時)	8cent	3cent	5cent

### 4.3 携帯電話のカンボジア語対応

既に述べたようにカンボジア国内においては、カンボジア語が使われておりますが、母音及び子音の数が多く、フィーチャーフォンでの入力には難しいものでした。2006年以降、各社の携帯電話端末はカンボジア語に対応してきており、スマートフォンの普及に併せて、各OSも対応可能であり、iOSはフルサポート、アンドロイドはver4.1以降対応を開始し、ver4.4以降フルサポートとなっています。スマートフォンのQWERTYキーを使用すればカンボジア語の入力も比較的容易で、SNS等のカンボジアの投稿などを良く見ます。

### 4.4 地方の携帯電話事情

カンボジアの電化率は4割程度であり、地方部では必ずしも電気が引かれている状況ではありませんが、一方で、携帯電話に関しては仕事や家族との連絡で使うため、地方部でも8割以上の人が持っています。電源については、バッテリー屋という商売があり、ディーゼルエンジンを動かして、車のバッテリーを充電する商売などが行われています。各家庭でバッテリーを所有し、それを使用して携帯電話の充電、夜間の照明などに使用しています。電化されていない地方部においては、電源の問題があり、スマートフォンなどはあまりみられず、電池の持ちが良い機種が主に使用されており、この点からも地方部のスマートフォン保有率が都市部の半分程度となっている事情が伺えます。

## 5. カンボジアの情報通信に関する今後の動向

### 5.1 携帯電話会社の統廃合及び普及

携帯電話会社に関しては、実質的には3社の競争状態であり、これらの3社は現在設備投資を順次進めており高品質なサービスを展開できることから、今後新たな事業会社

が上位3社のシェアを奪うようなケースは想定されず、合併、吸収等により6社ある携帯電話会社の統廃合が更に進むことになると考えられます。

また、現在の携帯電話加入数は前述の通り横ばい状態にはありますが、今後人口増加が見込まれるため、SIMカードベースの加入数については人口増加に伴い微増していくことが想定されます。

また、スマートフォンの普及については、地方部での電化率が今後順次改善していくことに伴い、地方部においてもスマートフォンの普及が進んでいくことが容易に予想されます。

### 5.2 海底ケーブルの敷設

現在、カンボジア南部のシハヌークビル州に、日本とシンガポールを結ぶ海底ケーブルの支線を陸揚げする計画が進められています。これまで、インターネットの接続は、隣国のタイ・ベトナムを経由しなくてはならなかったところ、今後は直接接続できるようになり、現在の隣国への接続料を支払わなくてはならないこと、接続速度の制限を受けることがあったことが解決され、更なるインターネット料金の低廉化、速度の向上につながると考えられます。

### 5.3 選挙とSNS

カンボジアは、1993年のUNTAC選挙から5年ごとに選挙が行われ、2013年に5度目の選挙が行われました。この選挙では、与党人民党は90議席から68議席へ大きく減らし、野党救国党は29議席から55議席へ増加しました。TV等の既存のメディアは政府の情報は流すが、野党の情報発信は行われまいと言われており、この野党の議席の大幅な増加は、SNSのFacebookによる情報発信・情報共有が原動力とされ、若者を中心に野党に関する情報をFacebookにより共有し、デモなどの選挙キャンペーンが行われたと言われております。次回選挙は2018年に行われる予定で、野党が更に議席を伸ばすのか、与党が政権を維持できるのかが注目されています。2018年には更にスマートフォンやインターネットの普及が進んでいることから、今回の選挙に関して情報通信機器やFacebookなどのSNSの利用の影響が更に大きなものとなってくると考えられます。

※ 本稿は、筆者の個人的見解に基づいています。